

詩篇46篇・神はわが^{やぐら}櫓 —平和の歌—

坂巻 隆男

1はじめに

- (1) 話の順番：i 講話の目的、ii 詩篇46篇を読む、iii 現代の我々に語るもの、iv まとめ
- (2) 講話の目的：神から真理を示され、励ましと希望を与えられて、神への信頼をもちつつ共に《神の国》を目指して地上の旅を続けたい。
- ① 浜松集会の霊的系譜：内村鑑三—矢内原忠雄—溝口正
神の平和が成るために祈り、労する＝地の塩、世の光としての働き。
- ② 矢内原の内村記念講演「無教会主義とは何か」（1956年）
「無教会主義には、社会の実際問題に対する鋭敏な批判があります。エレミヤとかイザヤとかイエスなどがしたような^{よげん}預言者的な社会批判の精神が、無教会にあっては常に新鮮であります。・・・無教会の純福音はこの世的な宗教ではない。社会的宗教ではない、それは霊的宗教であると言うことは、本当のことですが、しかし^{けいふ}霊的な信仰を持てばこそ、神の言葉に照らして社会の現実を見ることができるので。・・・無教会主義は神の国を^{うた}霊的に待ち望むものである。・・・」
- ③ 霊的信仰：
純福音＝霊的信仰→預言者的な社会批判の精神へという順番。
信仰によって神の国（神の平和・シャーロームの支配する世界）を待望する→^{たましい}魂に信仰による平和を与えられる→信仰によって、現実社会を批判し、平和を求める生き方をする。
- ④ 詩篇46篇「神はわが^{やぐら}櫓 —平和の歌—」は、神への^{うた}信頼の詩。
→聖霊（復活のキリストの霊）によって霊的信仰を与えられ、神を讚美する。

2 詩篇を交読：2～12節

- 1 詩篇46篇とは：神ヤハヴェに対する「われら」の信頼を告白し、ヤハヴェの^{わざ たたえ}業を讚える力強い詩である。

全体の構成：3連から成る。第1連2～4節 第2連3～8節 第3連9～12節
第1連に「折り返し」（万軍のヤハヴェは～我らの櫓）がないが、これを補うと各連の行数等しくなり、完全に均整のとれた詩となる←筆写の際の不注意で落とされたか？（ATD）。

ただし、この考え方に本文批評的な根拠はない（月本昭男『詩篇の思想と信仰Ⅱ』）。

4 講解 (語句の注を含む)

1 節

語句の注 コラハ：神殿楽団、アル・ムース式：調べの名称であろう。

(1) 第一連：2～4節

2 節 神はわれらの避け所また力、

悩める時のいと確かな助け。

3 節 それゆえ地は変わり、山が海の最中^{もなか}に移っても

われらは恐れない。

4 節 その大水は騒ぎ立ち

その高ぶりに山々は揺らぐ(とも)。 セラ (関根正雄訳、以下同様)

A. 語句の注

2 節 避け所 (マフセー)：「身を避ける」の派生語、力：「砦」とも。70人訳では「希望」。

いと確かな助け：「必ず在して」とも。

3 節 地は「変わり」：「揺れる (ヒンモール)」との読み替えも→地震。

4 節 その大水は騒ぎ立ち：その＝「海」の、騒ぎ立ち：「泡立つ」、高ぶり：「高波」

山々は揺らぐ(とも)：「揺らぐ」は「地震」と同じ語源。

B. 講解

第1連は、神ご自身が「われらの避け所」であるがゆえに、大地や山々が揺らごうとも、海の水が騒ぎ立とうとも、「われらは恐れない」と高らかに宣言する。これは、詩全体を貫く信仰である。

2 節：「神はわれらの避け所また力、

悩める時のいと確かな助け。」

神殿祭儀の場で、会衆は歓声を上げて、このように信仰告白した。過去の数え切れないほどの困難に際して、神は助けとなってくださった。その歴史は、神の愛の歴史である。これからも神は、我々と共にいてくださるであろう。

3、4 節：「それゆえ地は変わり、山が海の最中に移っても

われらは恐れない。

その大水は騒ぎ立ち

その高ぶりに山々は揺らぐ(とも)。」

不滅と思われる山々が海の高潮の下に沈もうとも、我々の信仰を脅^{おびや}かすことはできない。

神によって押し静められた^{たいこ}太古の海の荒波が、今新たに高まって、今にもこの世界を飲み込もうとしている。

しかし、^{けんご}堅固な櫓としての神は、世界の破滅の大波の上にそそり立つ。神は世界の破局に勝利される。信仰者は破局の中にも、神の働きと神の勝利を見る。

この宣言の背後には、神が天地宇宙を創造されたことを^を信じる創造信仰がある。地や山々が「揺らぎ」、海の水が「騒ぎ立つ」とは、創造以前の混沌を象徴している。神ヤハヴェは、荒れ狂う海や大水の混沌を制圧して世界を創造されたのである（詩篇 74 : 13 ~ 17）。

(2) 第2連: 5~8節

- 5節 一つの川〔^があり〕、そのいくつかの流れは
神の都^{みやこ}をよろこばせ、
いと高きものはそのみ住居^{すまい}を聖別^{せいべつ}される。
- 6節 神はその中^{いま}に在し、都は動かない、
神は朝早くこれを助ける。
- 7節 民らは騒ぎ、国々は動く。
彼^いその声を出せば地は崩れる。
- 8節 万軍^{ばんぐん}のヤハヴェはわれらとともに〔在^{いま}す〕、
ヤコブの神はわれらの櫓^{やぐら}。 セラ

A. 語句の注

- 5節 一つの川〔^があり〕: 「川」は「海」とは逆に、地を潤^{うる}し、生命^{はぐく}を育む。
いくつかの流れ (ペレグ): 「流れ」は詩篇 1 : 3 の「水路」と同じ。
神の都: ヤハヴェ神殿の置かれたエルサレム。
- 8節 万軍のヤハヴェ: 「万軍のヤハヴェ=ヤハヴェ・ツェバオート」は、自然の運行を支配する神を表す (ATD)。
われらとともに〔在^{いま}す〕: 神の現臨^{げんりん}の告白→イザヤ 7 : 14 のインマヌエル (神われら共にいます)
われらの櫓: 櫓は^{じょうさい}「城砦」とも。70人訳では「われらの助け手」

B. 講解

第2連は、豊かな川の水で潤される「神の都」は、民らがいかに「騒ぎ」、国々が「動く」
とも、神の住まいであるがゆえに、「動揺しない」と詠われる。

- 5節: 「一つの川〔^があり〕、そのいくつかの流れは
神の都をよろこばせ、
いと高きものはそのみ住居^{すまい}を聖別される。」

多くの支流を持つ川は神の祝福の湧き出る力と同時に、危険が迫った都を守る神の現臨を表す。

混沌の力を象徴する「海」とは逆に、地を潤し、生き物を育む「川」と「その流れ」は生命の豊かさの象徴である。(現実のエルサレムは乾燥した高地にあり、大河が流れるわけではないが、) 神が豊かな生命の源泉であるがゆえに、その「み住居」である「神の都」は確かな潤いのある理想の都として描かれる。

この「神の都」は、終末的な天のエルサレムに通じる。

6 節：「神はその中に在し、都は動かない」

頼りうる攻防の力、安全の保証は、エルサレムの堅い城壁や有利な地形ではなく、聖なる神の現在である。

第1連の「山々」、海の「水」は、第2連で「諸国民」、「諸王国」に視点が行き移している。自然界の「騒ぎ立つ」海を制する創造の神は、「騒ぎ立つ」地上の国々を静める歴史の神でもあることが、示される。

「神は朝早くこれを助ける」

最後の夜警の出る時、危険は頂点に達するが、この時、神が介入して助ける。そして、朝、神の力強い業が明らかになる。

7 節：「民らは騒ぎ、国々は動く」

イスラエルの民の苦難を具体的に示す。それは、どよめきつつ押し寄せる諸国民の襲撃のこと。

「彼その声を出せば 地は崩れる」

神がみ声をとどろかせれば、「地は崩れる」。彼らはエルサレムの門前で一敗地にまみれる。

神は、世界の上にあります主でありつつ、歴史に介入される。神は自然と歴史の両方を統べられる。

8 節：「万軍のヤハヴェはわれらとともに〔在す〕、ヤコブの神はわれらの櫓」

この折り返し句（リフレイン）は、諸国民の襲撃の戦闘のどよめきの中で、勝利のファンファーレのように響きわたる。

万軍のヤハヴェは、「われらの櫓」であるがゆえに、神の都は堅固な「城砦」とされるのである。

(3) 第一連：9～12節

9 節 来て、見よ、ヤハヴェのみ業を。

彼は地に驚くべきことをされる。

10 節 地の果てまで戦をやめさせ、

弓を折り、槍をこぼち、

戦車を火で焼かれる。

11 節 心を静めて知れ、われこそ神、

わたしは国々の中に高くされ

地の上に高くされる。

12 節 万軍のヤハヴェはわれらとともに、

ヤコブの神はわれらの糧。 セラ

A. 語句の注

9 節 ヤハヴェのみ業：神の創造の業のこと。

驚くべきこと：10 節がその内容。「こと」は複数。

10 節 戦をやめさせ：戦争は複数形。地上から「戦争」が止む時代の到来。

戦車（アガロート）：70 人訳では「盾」（アギロート）と読み替える。

11 節 やめよ：武装放棄を迫る言葉。

知れ、われこそ神：「ヤハヴェのほかには神はいない」という含みあり（詩篇 100:3 参照）。

高くされ（ルーム）：70 人訳による。「そびえる」。

B. 講解

第3連では、

- ①まず、「地の果てまで戦をやめさせ」る神ヤハヴェの「業」が讃えられる。
第2連で、「民らは騒ぎ、国々は動く」と表現された事態が「戦い」として具体的に明示され、それが神ヤハヴェによって地上から一掃されるのだ、と（10 節）。
- ②それゆえ、「国々の」民はこのヤハヴェを真の神として崇めなければならない、とヤハヴェ自身の言葉をもって告げられる（11 節）。

9 節：「来て、見よ、ヤハヴェのみ業を。

彼は地に驚くべきことをされる。」

神の大いなる救いの御業は成った。何が起きたのか自分の目で見よ。次の 10 節が、その「驚くべきこと」の内容である。

10 節：「地の果てまで戦をやめさせ、

弓を折り、槍をこぼち、

戦車を火で焼かれる。」

勝利を期して襲いかかる敵の軍勢に代わって、屍と砕かれた武器に覆われた戦場の殺伐とした光景が広がる。

身の毛のよだつほど怖ろしい光景である。生ける神に逆らい、神の強い拳に打たれて、人間の力が打ち砕かれている。

しかし、それが信仰の目に映るすべてでもないし、最後のものでもない。神はその破壊をより高い目的のために善用される。

破壊された武器は、人間の力の辿る道の終わりであるが、そこは、神が人間とともに歩まれる道の始めとなっている。破壊された武器は、全地の戦いをやめさせる神の平和意志を物語っている。

恐るべき破壊に直面しても、信仰は目に映る所に逆らい、あえて神の実現した平和の世界（神の国）を望み見て、高き所に登っていく。神の側から考え、神の側から地上の現実を見る。

11 節：「心を静めて知れ、われこそ神、
わたしは国々の中に高くされ
地の上に高くされる。」

詩のクライマックスである。神ご自身が現れ、諸国民に向けて言葉を出される。

「心を静めて知れ、われこそ神」→「(戦いを) やめよ、私こそ神であることを知れ」。

世界が神を認め、神に服従することが、平和の国、神の国の目的である。

「わたしは国々の中に高くされ 地の上に高くされる。」

神は世界の主として、諸国民と地の上に「高く」そびえ、だたひとり全世界を越えておられる。

この神の啓示、神の顕現は、信徒の喜びの体験の頂点であるが、これは同時に、全世界にとっても救いの頂点である。世界の歴史の完成は、神の御心（愛）によるものであり、神の平和、神の国の到来による。

12 節：「万軍のヤハヴェはわれらとともに、
ヤコブの神はわれらの糧」

最後の折り返しの言葉は、神がご自身を現され、語られたことに対する会衆の感激と喜びを響かせている。

この言葉には、幸いと希望と信頼の思いが込められている。

幸い：力ある神との交わりを許され、その御翼の陰に休らうことができる幸い。

希望：神の憐れみによって、神の国に迎え入れられるという希望。

信頼：神の国の実現に向かって生かされているという信頼。

5 現代の我々に語るもの

① 代々の聖徒たちに不拔の力を与えた第 46 編

詩篇 46 編は、二千数百年にわたり、代々の聖徒たちの口に上った詩。

彼らを慰め、励まし、不動の信仰と讚美の思いを与えた。

特にルターの讚美歌「神はわがやぐら」、我々の近くでは、内村、矢内原の戦いを励まし、また溝口先生をも支えたであろう。

矢内原の感慨：「長寿と救い」（1960 年）

「過ぐる日の〔15 年〕戦争を通ってきた者として、またたびたびの伝染病や、急性の病気、交通事故、地震・台風などの天災を経験した者として、良くも様々な災禍を免れて今日まで生きながらえてこられたものだと思う」。

それらの苦難のたびに、矢内原もまた、

「神はわれらの避け所また力、

悩める時のいと確かな助け。

それゆえ地は変わり、山が海の最中に移っても

われらは恐れない。…」とこの詩を口ずさんだことだろう。

②第1連より

現代への問い：我々も、恐るべき大地震、津波の自然災害、原発事故を経験したが、この危機を経験して、我々はどこに向かうのか。

また、現代は、莫大な核兵器の蓄積（広島型原爆 147 万発分）と地球環境問題が限界に達しようとしている。

〔 死の道：マモンの神（財神）を拝み、偶像や人の力に頼ろうとするのか。

〔 生命の道：我々は、生ける神に向かう。神の前に悔い改め、神と共に生きる道、そして、人びと（他者）と共に、自然と共に生きる道を選ぶ。

③第2連より

天の都＝まことのシオンは、神を否定する者たちの攻撃にビクともしない。

また、聖霊（復活の主）が地上のエクレシアに命を注ぎ、その中にいまし、これを喜び、聖別し、朝早く助ける。エクレシアを攻撃するこの世の勢力は、神の一声で崩れ去る。

④第3連より

歴史の終極に於いて、神は地上から戦争を一掃し、永遠平和の《神の国》を実現される。歴史は、神の驚くべき御業によって完成される。

そして、神がすべてのすべてとして崇められるに至る。

◎ 我々は、神の勝利への確信を与えられるがゆえに、この世の困難と危険を直視して、主の御足の跡に従いつつ、この地上を旅する。真実に、しなやかに。

6 まとめ

勝利を与える我らの神に栄光と讚美あれ！

参考文献：

1. A. ヴァイザー『ATD旧約聖書注解 13 詩篇 42～89 編』、ATD・NTD 聖書注解刊行会、1985年（原著 1979年）
2. 月本昭男『詩篇の思想と信仰 II』新教出版社、2006年